

詩的自我の行方

——Peter Waterhouse の詩 Blumen について——

尾 立 勝 典

現代詩の危機がささやかれ始めて久しい。そこに見られる傾向のひとつは詩的自我の解体である。従来の詩の支柱となっていた一人称単数の私という定点は崩壊しつつあると言える。しかしながら、依然として現代詩が存続しているという事実は、伝統的な詩的自我が本質的に他のものへと解体されたことを意味しているのではないか。

このような潮流を代表する詩人が Peter Waterhouse (1956-) である。処女作の Menz (1984) や第二詩集の passim (1986) では、自我と認識に対する社会的言語の専制力を言語実験によって脱構築しようという詩的戦略が窺われた。しかし、彼の最新作 Blumen (1993) では、詩的自我が完全に分裂し、複数化してしまう。自我意識は言語によって形成される。したがって、社会的言語が意識の中で解体されるにつれて、自我も輪郭を喪失し、自己同一性が崩壊するのである。

詩 Blumen において複数の「私」が語るのは郊外の産業地帯の風景である。そこでは、自然の有機性と都市の機構が断ち切られると同時に、双方が混在する。見捨てられた風景の含意は非秩序、非中心性、越境性である。複数の「私」もまたこの非秩序の中に散在している。必然的にテキストはモンタージュ形式を呼び込む。また、引用と換骨脱胎によって、複数の「私」の声の中へさらに他者や過去の自分の声が混入する。解体してしまった詩的自我に代わり、隠れた詩の生成原理となっているのは、Blu (青) — Lumen (光) — Blumen (花) という類音連想である。これはいわば主導的なモチーフであり、複数の「私」が語る非論理的言語の論理的共通基盤ともなっている。

各断片の内容は難解でその相違は著しいが、一貫して読み取れる傾向は二項対立的な思考からの脱却である。モチーフから派生した下位連想がさまざまな対立概念を結び付けるからである。技術と自然、生と死、善と悪などの区分は社会的言語によって生み出されたものであり、言語範疇の無効化によって解消される。形式的にも、当初孤立していると思われた諸断片は、結尾近くまで隠されていたモチーフに引き寄せられ、相互に編み込まれて「織物＝テキスト」を形成してゆく。このように、詩的自我の解体が断片的テキストをもたらす一方で、類音連想は詩の生成原理として主権を握り、越境効果と融和作用を及ぼすのである。

しかしながら、モチーフを生成原理と呼ぶことができるならば、そこに詩的自我本来の所在があるのではないかという疑念が生じる。しかし、この類音連想は本来無意味な言葉遊びに過ぎない。したがって、詩的自我の様態は自己の不在と定義される。ここでもやはり詩的自我の崩壊が露出しているのである。

Waterhouse は社会的言語の支配だけではなく、ダダイズムの意味破壊やシュールリアリズムの自動記述にも絡めとられまいとする。その双方ともが言語の暴力だからである。したがって、彼の場合、詩的自我の崩壊は無意識の現象というよりも、半ば戦略的なものであり、意識に植え付けられた言語の機構はその内側から揺さぶられ脱構築されると言える。伝統的な詩的自我はこのような言語戦略が生み出すテキストの中に現れては消えていく一時的な複数の視点として解消されてしまったのである。